

フランスにおける農村の人口回帰と過疎化の展開

市川康夫

筑波大学生命環境系

フランス農村は、19世紀初頭から1970年代までの「農村流出 (exode rural)」の時代から、人口の地方分散と都市住民の流入による農村の「人口回帰」時代へと転換している。本研究は、フランス農村における過疎化の展開を、人口動態や政策、ツーリズムとの関係に注目して論じることを目的とした。1990年代からの農村人口回帰は、通勤極や小都市との位置関係から、人口減少地帯である「空白の対角線」に新たな過疎化の格差を生み出した。そのなかで過疎地域の維持に重要となるのはコミューンであり、その持続性は行政範囲を補完する柔軟な領域に支えられていた。また、過疎解消に向けた政策対象は農業から農村へと転換し、法定年次休暇制度や早期離農政策は高齢者を農業から解放しツーリズムへと向かわせた。ツーリズムの展開に関わる過疎地域持続の背景には、フランスの労働観や農業文化、そして消費対象としての農村の存在があり、別荘地や二地域居住地としての役割が人々の還流を生み出していることが重要である。

キーワード：農村流出、過疎化、農村コミューン、「空白の対角線」、高齢者、ツーリズム

I はじめに

農山村における人口減少や高齢化に特徴づけられる過疎化の問題は、日本のみならずヨーロッパでも共通の課題である。本論は、ヨーロッパのなかでも1990年代以降農村において人口が増加しているフランスを取り上げ、過疎化の展開を人口動態や政策の変遷、ツーリズムとの関係に注目して論じることを目的とした。

フランスの過疎を考える上において、まず日本とヨーロッパにおける過疎の差異を捉える必要がある。フランス語においては、日本語の「過疎」に相当する単語は存在しない。日本でいうところの「過疎」に強いて単語を充てるとすると、「人口減少 (Dépeuplement)」という言葉が該当する¹⁾。山下 (2014) が指摘するように、日本は先進国のなかでも過疎や限界集落といった集落衰退への危機意識が特に強く、いわゆる日本人が言う「過疎」への意識が希薄な欧米では議論の中心は人口減少そのものであり、その社会的な繋がりやコミュニティの衰退は日本なら

では関心事である。こうした過疎概念の相違の背景には、日本とヨーロッパにおける農村の集落やコミュニティの差異があげられる。それは、日本の農村では共同農作業を基礎とした横の繋がりがコミュニティの維持において重要であるのに対し、ヨーロッパでは粗放的畜産や小麦栽培などを基礎とした個人農場が営農の主体であることから、日本のような共同作業や結といった水平的な繋がりが希薄なことである (山下2012; 2014)。

こうした事情を背景とすることもあり、フランスでの過疎に関わる研究は、過疎そのものというよりも農山村に関わる他の議論の中で補完的に論じられることが多い傾向にある。これら過疎に関わる研究を整理するとするならば、大きく分けて次の二つの潮流が存在する。一つは人口の移動や動態から生じる地域的差異やその不均衡の中で過疎が議論されるものであり、もう一つは条件不利地域に代表される農村の構造的問題のなかで過疎が議論されるものである。前者の人口からの研究は、次にあげる二つが主要なア